小児看護 8 月号　第 45 巻第 8 号（通巻第 572 号）　2022 年 8 月 15 日発行（毎月 1 回 15 日発行）
ISSN 0386-6289

小児看護 8

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

Vol.45 No.8 AUGUST
2022

COVID-19の経験とともに変化する人材養成のかたち

連載

もっと知ろう！障害がある子どもと家族のくらしの支え方

重症心身障害児のライフステージにおける成長・発達支援

へるす出版

連載

心が歌えば、世界が揺れる

佐藤聡美 Sato Satomi
聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第15回 1＋2＋じゃがいも

２と１は同時にやってくる。

数学者の観点は面白い。生まれたての赤ちゃんは，母親も自分の一部だと思っている。それが，ある時，お母さんと自分は違うと気づく。混沌とした世界に，差異という亀裂が走って，自分は１で，母親は２になる。母子関係の始まりは，差による分離だと数学者の森田真生は言った。

彼が東京大学の数学科の学生だった時に，飲み会に参加すると，居酒屋の下足箱は不思議と素数から埋まっていったという。17と18であれば，圧倒的に17が特別だという。数学者には，素数に対する愛着が感覚としてあるらしい。

このたび，ひょんなことから，大学の同僚が耕している畑に子どもと一緒にお邪魔させてもらった。畑仕事をしたことのない私は，慌てて，長靴，日よけ帽子，軍手，靴下を買いに，隣駅に向かった。

降り立った駅の改札で，一瞬，私の記憶は混乱した。駅の左手には，総合病院がそびえ建っている。子どもが発熱や嘔吐の時に駆け込んでは入院していたので，「病院の駅」と思い込んでいた。しかし落ち着いて右手をみると，目的のホームセンターがちゃんと建っていた。緊迫して病院しか目に入らない時とは，町の風景が大きく違って見えた。

きっと小児がんの子どもと家族も，虫眼鏡でみたように病院が大きく見えて，通り過ぎる町並みは印象が薄いのかもしれない。

休みの日に朝から，電車に揺られて，待ち合わせの駅を目指した。子どもは上機嫌である。山の上の広い畑に着くと，同僚に教わりながら，私と子どもは次々とじゃがいもを掘った。もちろん，虫もたくさん出てくる。皮の薄いじゃがいもに傷がつかないように，やさしく掘り出す。

もうじゃがいもは無いだろうと，耕運機をかけると，まだ隠れていたりする。「足元にも転がっているよ」と声をかけると，子どもはじゃがいもを踏まないように気をつけて，尻もちをついてしまう。そこにカマキリの幼虫がいた。子どもは捕まえようとする。

同僚がかごを持ってきてくれた。子どもは一生懸命，じゃがいもをそのかごに入れる。200個ぐらいあるだろうか。自らかごをもって，同僚の車まで運び始めた。数歩歩いては，かごを地面において，持ち直す。その繰り返しだが，１である我が子は，２である私にきっぱりと線を引く。「ママ，絶対に手伝わないでよ」と。１はやがて２より大きくなる。人間の不思議である。

佐藤聡美
さとう・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士，公認心理師。NPO法人エゴノキクラブ理事長。富山県出身。米国のBellevue Community Collegeを卒業後，お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。お茶の水女子大学特任講師を経て，現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。

©へるす出版